

山東京伝『絵本梅花氷裂』と金魚

山名順子

1. はじめに

文化四年(一八〇七)に出版された山東京伝の読本『梅之由兵衛物語絵本梅花氷裂』(以下『梅花氷裂』)は、『茜染野中隠井』『隅田春妓女容性』等の「梅の由兵衛もの」とよばれる一連の歌舞伎・浄瑠璃作品を主な典拠として書かれた⁽¹⁾。これらの典拠をつなぎ、物語の世界を統一する働きを持つものが「金魚」である⁽²⁾。本稿の目的は、読本『梅花氷裂』において、「金魚」が果たす役割と意義について改めて検証することにある。

2. 『梅花氷裂』における金魚

まず、『梅花氷裂』の梗概を、金魚に注目しながら簡単に記す。便宜上、梗概を区切って番号を付けた。以下、本文中に使用した番号は梗概の番号に対応する。また、人名には囲みを付し、本稿末尾に『梅花氷裂』の登場人物相関図を添付した。

絶海禪師の渡明に同行した浪人粟野十郎左衛門は、金魚を日本へ持ち帰る。上京中の唐琴浦右衛門は、金魚を求める。金魚を主君小申に献上した浦右衛門は、褒美として鎬藤四郎の刀を下賜される⁽¹⁾。信濃に帰った浦右衛門は、金魚を養殖する。増殖する金魚を目にした浦右衛門は、自分に嫡子のないことを嘆き、妻の棧と相談して、子孫を残すために妾を持つことを決める⁽²⁾。金魚の餌を採りに出かけた唐琴家家来鷹森数右衛門は、旧知の商人古手屋三郎に偶然再会する。三郎は唐琴家の妾として藻の花を紹介する⁽³⁾。藻の花の懐妊後、浦右衛門は主君の鎌倉在勤に随行する。浦右衛門は妻妾に、妾の安産と金魚の安全とを心がけるよう指示する⁽⁴⁾。しかし、浦右衛門出立の一ヵ月後、棧は隣家の猫に金魚を盗まれる。猫を殺した隣人旧鳥養文太と出会った棧は、騙されて密通を始める⁽⁵⁾。棧は夫と妾が棧の殺害を企てているという養文太の虚言を信じ、藻の花を監禁、折檻する。藻の花は飢え、しだいに金魚を思わせるおそろしい姿へと変化する⁽⁶⁾。ある夜、藻の花は逃亡の機会を得たが、金魚槽の水を飲んで叫んだために棧と養文太に発見

される。藻の花は養文太に、胎児は棧に殺害される。藻の花の血を浴びた金魚は藻の花そっくりの姿に変化し、獅子・乱中の始めとなった。養文太と棧は鎬藤四郎の刀を持って出奔する⁽⁷⁾。凶報を受けて帰郷した浦右衛門は、変貌した金魚をみて敵討を決心し、十七日間の施餓鬼の後、佐久郡長泉寺の池に金魚を放つ。金魚は長泉種の始めとなる⁽⁸⁾。妻敵討に出発した浦右衛門は養文太に返り討ちにされる。同行した数右衛門は、主君と同時刻に粟野十郎左衛門に斬殺される⁽⁹⁾。十郎左衛門の子長吉は、泉州堺で病床の母を手厚く看病している。長吉は、十七日間の苦行の末、井戸の中から乱中を得た。金魚は七十両で売れ、堺種となった。しかし、夫の事件を知った母は気を病み、長吉の異父姉小梅が数右衛門の息子に嫁いでいると言いつつ死亡する⁽¹⁰⁾。棧と養文太は葡萄峠の麓で追剥をして暮らしていたが、鎬藤四郎の刀を盗まれる。棧はある日夢の中で金魚に咬まれ、次第に金魚(乱中)のような姿となり、錯乱する。棧は病から回復するが、姿は元には戻らなかった⁽¹¹⁾。養文太は棧を棄てて旅立ち、羽州男鹿山で山賊の頭を謀殺して跡を襲い、栄華を極める。後を追ってきた棧は、養文太に惨殺される。死に際して騙されていたことを知った棧は回心し復讐を誓う⁽¹²⁾。武蔵国に住む、数右衛門の息子梅の与四兵衛は、浦右衛門の弟滝次郎の訪問をうけて事件を知り、父の敵を討つ決心をする。その翌年、出発準備中の与四兵衛は、行方不明であった鎬藤四郎の刀を発見するが、代金の工面ができない。そこへ十郎左衛門が来訪して切腹する。彼は藻の花の兄であり、養文太と誤って数右衛門を斬ったと告げる。与四兵衛が十郎左衛門の代わりに笈を斬ると、中から傷ついた長吉が現れる。長吉は持参した五十両が無駄になったと嘆くが、十郎左衛門は、自分が絶海の反対を押し切って金魚を持ち帰ったことが一連の悲劇を招いたと説明し、金魚によって得た刀を、金魚を売って得た金で買うことで、因果が消滅すると主張する。しかし、買戻した刀は偽物であった⁽¹³⁾。

〔キーワード〕山東京伝／読本／『絵本梅花氷裂』／金魚／女性性／怪異性

*平成一五年度生 国際日本学専攻

『梅花水裂』の金魚は、宝暦四年（一七五四）に馬場文耕が著した『世間御旗本容気』巻四の二「年中在番に道中往来する飛脚形氣」を典拠として³⁾いる。まず、梗概を簡単に記す。

金魚を好む武士、大久保金五右衛門の妻が、夫の在番による留守中に、使用人の真尾左中太と密通するが、左中太は同時に侍女のらんとも関係を持ち、らんは妊娠している。二人の関係を知る奥方は、らんを嫉妬していた。一方のらんも、金五右衛門の娘おこうが病に臥した際に奥方の密通に気づく。らんは病床の娘にねだられて金魚を与えるが、金魚が娘の過失で死ぬと、奥方はそれを理由にらんを折檻して餓死させる。らんの死後、大久保家で飼育されていたすべての金魚は、妊娠時のらんの姿そっくりに変化し、らんちゅうとなった。この事件の後、自らの妊娠を知った奥方は、左中太と共に夫金五右衛門を毒殺しようとするが失敗する。妻敵である左中太は金五右衛門に手討ちにされ、奥方も自害した。一連の事件に責任を感じたおこうは、十九歳で母の死を弔うために断食して往生を遂げる。

すでに指摘されているように⁴⁾両作品には共通点が多く、たとえば夫の留守中に妻が密通する点、妻が恋敵に嫉妬して折檻を行う点、死んだ女の怨念が金魚に憑き、らんちゅうの起源となったとする点など、大筋ではほぼ一致する。一方、相違点としては、金魚が主君から下賜されたものではないこと、金魚の死は娘の過失であり妻の過失ではないこと、金五右衛門夫妻には娘があることがあげられる。しかしここで注目したいのは、『世間御旗本容気』では金魚が奥方の死という結末と同時に物語から姿を消すのに対して、『梅花水裂』では京伝が金魚を全編にわたって利用しつづけている点である。このとき京伝は金魚に二つの面で典拠をつなぐ役割を与えている。一つめは登場人物を結びつける役割、二つめは怨念の媒体としての役割である。

i 登場人物を結びつける金魚

『梅花水裂』では重要な事件に金魚が関わる場合が多い。金魚は栗野十郎左衛門の手で日本へ渡来し（梗概①）、唐琴浦右衛門の手に渡る。浦右衛門は金魚の繁殖力を見て嫡子を得るため妾を求め（②）、家臣の数右衛門が金魚の餌を探りに出かけて偶然再会した古手屋三郎が藻の花を妾として紹介する（③）。また、浦右衛門の妻棧と養文太の密通は、猫に金魚を奪われることをきっかけとして始まる（⑤）。浦右衛門は妾の死後、十七日間の仏事行って金魚を放生し（⑧）、十郎左衛門の息子長吉は十七日の苦行の後に井戸から蘭鑄を得て金七十両に換える（⑩）。この金が後に悲劇を生む。これらの

複雑な人間関係と因果関係は、前編の最後に十郎左衛門の口から説明され、整理される（⑬）。以上のように、物語の中で重要な事件が発生し、新たな登場人物が紹介される場面に、大抵金魚が登場していることがわかる。また、従来不要とされてきた十郎左衛門による数右衛門の殺害場面（梗概⑨）も、金魚を日本に齎した十郎左衛門の再登場と、彼の息子長吉の登場へ繋がり、物語の後半に拮抗を与えている⁵⁾。さらに、一見無関係な浦右衛門と長吉も、「十七日間」の行事の後に同種の金魚を放生・獲得するという繋がりを持ち、金魚によって登場人物がより緊密に結び付けられていることがわかる。このように、金魚は複雑な人間関係を一つに繋ぎ、登場人物を一つの場所へと引きつける重要な役割を持っているのである。

ii 怨念の媒体としての金魚

金魚と怨念は、妾藻の花の死によって結びつく。妊娠中の藻の花は、折檻と飢餓によって変貌し（⑥）、その醜貌は藻の花の血を浴びて変化した異形の金魚、蘭鑄へと移行する（⑦）。一方の棧は、夢中で金魚に噛まれて以来、蘭鑄に似た姿になって苦しみ、藻の花の霊に憑依されて養文太と棧への復讐を誓う（⑪）。その予言どおり、棧は養文太に殺害される（⑫）。

本文中で、藻の花殺害場面の金魚の異形と、病床の棧の醜貌とはほぼ同様に描写される。棧が蘭鑄の姿に変化することは、藻の花の怨念の作用を表すと同時に、棧が出産に失敗した母の姿を擬似体験することで、藻の花と棧が同化する過程を描いたとも考えられる。さらに、養文太に斬首されて怨霊と化した棧の動作は、藻の花の血を浴びて怨念の憑依した蘭鑄の動きに酷似する。京伝は、後編（未出版）では、妻妾二人の怨念が一体化して養文太を苦しめると予告した。二人の合体に先立って、京伝は藻の花と棧の怨念を意図的に同じ蘭鑄の姿に描いたのである。また、京伝は図版の視覚的な効果も巧みに利用している。『梅花水裂』において、金魚の怪は口絵の蘭鑄の図にのみ示され、本文の挿絵には現れない。一方の挿絵では、妊娠中の藻の花を模した異形の化物として、病床の棧を描いている。二つの化物は全く異なる姿に描かれているが、本文中では細部に至るまで同様に描写されており、出産に失敗した女性の怨念を具現化した同一の怪異として扱われていることが理解できる。ここからは、京伝が、蘭鑄の不気味な姿と女性の怨念とを融合させるために、文章と図版の双方を利用したことが伺えるのである。

以上のように、『梅花水裂』の金魚は、作品全体に登場して人物を相関させ、かつ怨

念の媒体として二つの役割を果たしながら物語を統括する役目を負っていた。では、「金魚」自体に京伝独自の趣向が盛り込まれている可能性はないのだろうか。

iii 京伝独自の趣向

佐藤深雪氏は、同時期に執筆された三つの読本『桜姫全伝曙草紙』『善知安方忠義伝』『梅花水裂』について、京伝が登場人物の形象に女性の持つ母性と魔性とを利用したと指摘した⁶⁾。さらに善塔正志氏は、京伝が登場人物の造形の本質を母性に置くとし、物語の中で「母性」という自我が、否定的現実による内面葛藤で喪失した後、自らの死を経て回復すると述べた⁷⁾。京伝が、登場人物の造形に際して母性にこだわる傾向は、例えば『世間御旗本容気』の奥方に娘があつたのに対して『梅花水裂』の棧に子がないことや、藻の花が出産に失敗することなどから読み取れる。先に述べたように、京伝は妊娠した女性の姿と、蘭鑄の姿とを同様に描いている。また、京伝は作品中に『和漢三才図会』の「金魚」の項から記事を引用しているが、同じ項目の中には金魚が「子ヲ藻中ニ生ミ、好ンテ自ラ喰ラフ」との記述がある。このことから、京伝が藻の中に生んだ自分の子を食べず金魚の性質を「藻の中の子＝藻の花の胎児」として利用し、藻の花に子を産めない産女としての性格を付与した可能性が伺える。京伝が人物造形に際して、母性を意識していたことは疑いようがないだろう。では、金魚が、京伝が意図的に描いたという「母性」を表象するための小道具として利用されている可能性はないだろうか。

梗概の②において、浦右衛門夫妻は、飼育中の金魚の繁殖力を見て、唐琴家に嫡子を誕生させるために妾を抱えることを決心する。ここでの金魚は子孫の繁栄を象徴するものとして利用されている。また、続く③では数右衛門が唐琴家で飼育する金魚の餌を採りに出かけた際に、旧知の古手屋から妾を紹介される。この場面は唐琴家が数右衛門を通して、金魚の繁殖に必要な手段である餌と共に、一家の子孫繁栄の手段である妾を同時に得るという二重の構造を持ち、やはり金魚に子孫繁栄が投影されている。さらに、浦右衛門は④での出立に際して留守中に金魚を大切に護るよう命じ、それと同時に藻の花の安産も命令する。ここからも、「金魚の安定＝家内の安定」の図式が連想できる。しかし、⑤で棧は、金魚を隣家の猫に奪われる。金魚はそのまま隣家へと流出し、猫の手にかかって死ぬ。この場面は、棧の貞操が隣家の簀文太によって失われ、藻の花が殺害される予兆として捉えうる。家の外に流出した金魚の死は、唐琴家の内側にあつた母性や貞操、子孫繁栄の方法の喪失を意味し、棧の密通と、藻の花という母性の損壊へと繋がっていく。果たして⑦で臨月の藻の花は隣家の簀文太に殺害され、

藻の花の怨念は金魚を妊婦の姿に変化させるのである。ここで金魚は、母性や子孫繁栄などの「善」なるものから、怨念や因縁という「悪」の蘭鑄へと姿を変える。やはり、京伝は『梅花水裂』において、金魚自体を母性や子孫繁栄の象徴として意識的に利用しているのではないだろうか。

3. 近世文学作品における金魚

金魚は十七世紀末ごろから近世の文学作品に登場する。元禄六年（一六九三）の井原西鶴『西鶴置土産』巻二の二「人には棒振むし同前におもはれ」では、「中にも尺にあまりて鱗を照たるを金子五両。七両に買もとめてゆくをみて。また遠国にない事なり是なん大名の若子様の御なぐさひに成ぞかし。」と、高価で庶民の手の届かないものとして描かれた⁸⁾。西鶴は、同年に刊行された『浮世栄花一代男』では、「鹿ノ子揃いの衣装川浪に移ろひ鯉鮒目におとろきて自然と金魚桜魚の如し」⁹⁾と、水面に映った女性の衣装の華やかな模様を、金魚の模様に合わせて書いている。鹿ノ子模様の着物に金魚を連想させる手法は『梅花水裂』の挿絵にも引き継がれ、藻の花の着物は鹿ノ子模様に水草を散らした柄に描かれている。また、文政五年（一八二二）に刊行された『柳多留七五篇』には、「金魚の尾かいどりを着た取廻し」という、金魚の尾の華やかさを遊女の服装に例えた一句がある¹⁰⁾。これらの例から、少なくとも近世中期以降には、金魚の姿と、女性の衣装や姿とが類似するという見方があつた可能性が伺える。では、『梅花水裂』のように、金魚を生殖や子孫繁栄の象徴として使用した作品はあるのだろうか。

文政十二年（一八二九）に刊行された曲亭馬琴の『風俗金魚伝』は、通俗本『通俗金翹伝』を翻案した合巻作品である¹¹⁾。馬琴は、翻案にあつて「金翹」に音の似た「金魚」の語を題名に採用し、主人公の家族の名を「鱗蔵」「水草」「魚子」「乙魚」など金魚を連想させるものに換えたうえで『通俗金翹伝』の主人公金翹の波乱の一生を浪人船尾鱗蔵の長女魚子へ移植した。そのうえで馬琴は船尾鱗蔵が金魚を養殖しているという独自の趣向を盛り込んでいる。物語の冒頭で鱗蔵は特別に丹精を込めて育てた三尾の蘭鑄を三人の我が子に例えて愛着するが、貧困のためやむを得ず最も大きな蘭鑄を手放す。その結果鱗蔵夫妻は冤罪を被り、長女の魚子が、身売りを初めとして各地を流転する苦難の中へと投げ出される。この趣向は、『梅花水裂』において金魚の盗難が唐琴家の崩壊へと繋がる構図に類似する。また、物語の終盤では、魚子の前世が天竺無熱池の「金魚」であつたことが明かされる。魚子の受難の原因は前世で多くの小

魚を食した罪障によるものと説明され、聖人の教化で物語は大団円を迎える。⁽¹⁴⁾ ことから、馬琴が魚子という一人の女性の造型に際して、「前世」である「金魚」を利用したことがわかる。金魚は魚子という女性であり、前世の因縁でもあるのである。しかし、『梅花水裂』の金魚が、要所に登場して物語世界を緩やかに結合する働きを持つのに対し、『風俗金魚伝』の金魚はたいが物語を動かす役割や力を持つことはない。また、『梅花水裂』で重き置かれた母性や魔性などの女性性も、『風俗金魚伝』では意図的に排除される傾向があり、馬琴が金魚自体に何らかの意味を持たせた可能性も薄い。『通俗金魚伝』を利用した作品としては、ほかにも天保三年（一九三二）に刊行された松亭金水の人情本『沈魚伝』が挙げられる。しかし、金水は『沈魚伝』執筆にあたって『通俗金魚伝』の筋書と、「金魚（沈魚）」という言葉を題名に利用したにすぎず、物語の内容に金魚の性質はまったく活かされていない。

一方、文化十一年（一八一四）に刊行された京伝自身の合巻『磯馴松金糸腰簀』には、以下の物語が挿入されている。梗概を簡単に記す。

武家甲賀三郎が嫡子誕生のために隠し持っていた妾^{うきこ}萍が、嫉妬深い妻の命令で殺害される。妾の血を浴びた金魚は臨月の妊婦の姿そっくりの蘭鑄となった。妻は暗殺の成功を喜んだが、ある夜、池から現れた金魚の妖怪を目にしてから毎晩金魚の怪の悪夢に悩まされ、病に臥す。その後、ようやく病から回復した妻は、金魚の妖怪に首を食い切られて怪死する。

この挿話は『梅花水裂』の妻妾の争いの焼き直しであり、妾の死後の蘭鑄の動きも「萍が血潮に染まりて一しほ赤くなり、腹膨れて懐胎の女の腹の如くになり、目大さになり、尾は三ツにさけてかしらにかぶりさながら怒れる体となる。これ蘭鑄といふ金魚いできし始めとかや。」⁽¹⁵⁾と描かれ、『梅花水裂』の「藻の花が吐きたる血あまたの金魚の身にしみこみ、斑の紅魚すべて人血の色に変じ、一しほ濃紅の色となり、眼をいら、げ、頬をふくらし、腹はたかくさし出て、妊婦の腹のごとくになり、尾さき乱れてさかしまに打かふり、憤怒の勢をなし」⁽¹⁶⁾に酷似する。しかし、『磯馴松金糸腰簀』の主題は御家騒動であり、金魚の利用はこの挿話に限られる。『梅花水裂』で描かれた怪異としての金魚もほとんど登場せず、妻の死も動物に乗り移った女の怨霊が、後妻の首を食い切るといふパターン化された怪異譚へと替えられ、病を通して妻妾が一体化する趣向も省かれている。ここからも、母性や怨念が色濃く投影された『梅花水裂』の金魚は、近世の文学作品の中では特殊な存在であると推測できる。『梅花水裂』において、「金魚」という一つのものに母性や子孫繁栄の象徴といった複数の性質を持たせた点、またそ

のうえで作品全体に配置した点に、京伝の大きな試みがあるのではないだろうか。

4. 近代文学作品における金魚

近代以降も、金魚は様々な作品に登場する。その中から『梅花水裂』のように、金魚に女性性と怪異性を持たせたいくつかの作品を例に挙げ、それらの作品の中で金魚がどのように扱われているかを考える。

i 女性としての金魚

金魚が「女性」を表す例としては、まず、明治四十四年（一九一三）『青鞥』に発表された田村俊子の『生血』があげられる。主人公「ゆう子」は、処女喪失の翌朝に、金魚の生臭さを「男の匂い」と感じてぞっとし、金魚の眼をピンで刺して投げ捨てる。さらに、ゆう子は変化した自分を「傷物」と考え、「毛孔に一本々々針を突き刺して、こまかい肉を一一と片づ、抉りだしても、自分の一度浸つた汚れは削りとることができない」と絶望する。長谷川啓氏はこの金魚への暴力を、男との性行為による男の匂いへの不快感と憎悪を現し、「男の匂いを発する金魚すなわち男」に対する象徴的な復讐と指摘した。これに対して鈴木正和氏は、「金魚」＝即「女性」とするわけにはいかない、「ゆう子」＝「魚」では、勿論無いとしながらも、ゆう子が鉢の中の金魚に「紅しほり」や「緋鹿の子」といった女性の着物の染模様由来する名を付けていることから、金魚を女性の「汚れ」た「躰體」とした。⁽¹⁹⁾これを承けて王紅氏は、語り手とゆう子が金魚に（女性性）を認めたとして、ゆう子が金魚を使って自分に起こった事件を再現したと述べた。⁽²⁰⁾つまり、ピンで金魚の「眼を刺す」という行為は、他者の視線を拒むゆう子の心情を表すと同時に性行為を意味し、投げ捨てられて腐敗する金魚は処女を喪失した女性、すなわちゆう子をさしていると考えられるのである。『生血』と同様に、金魚が少女から女への変遷を表す例は、昭和十四年（一九三九）『文學界』に発表された太宰治『女生徒』にも見られる。作中には「ああ、汚い、汚い。女は、いやだ。金魚をいぢつたあと、あたたまらない生臭さが、自分のからだ一ぱいにしみついてゐるやうで、洗つても洗つても落ちないやうで、かうして一日一日、自分も雌の体臭を発散させるやうになつて行くのかと思へば、また思ひ当ることもあるので、いつそのまま、少女のまままで死にたくなる」と、金魚の生臭さを「雌」成熟した女性⁽²¹⁾の体臭として嫌悪する少女の気持ちが描かれる。これらの例では、金魚と金魚の「匂い」

に女性性をみていると言えるだろう。また、これと似た例として、大正八年（一九一九）『赤い鳥』に書かれた北原白秋の童謡「金魚」「わたしの家」がある。以下に「金魚」を引用する。（引用にあたって適宜改行の位置をあらためた。）

母さん、母さん／どこへ行た。／紅い金魚と遊びませう。

母さん、帰らぬ／さびしいな。金魚を一匹突き殺す。

まだまだ、帰らぬ／くやしいな／金魚を二匹絞め殺す。

涙がこぼれる／日が暮れる／紅い金魚も死ぬ、死ぬ。

母さん怖いよ／眼が光る／ピカピカ金魚の目が光る。

この陰惨な童謡には、金魚を殺して「母さん」の不在と寂しさを紛らわす人物が金魚の目の光に怯える様子が描かれる。宮沢健太郎氏はこの童謡が、白秋の妻が出奔する直前に書かれたことを指摘し、童謡に白秋の「寂しさ、怒りや庇護を求める気持ち」がこめられているとした⁽²³⁾。また、宮本一宏氏は、白秋が妻の心変わりによる寂しさを、金魚を殺す詩文で補償している、と指摘した⁽²⁴⁾。ここでの金魚は「生血」の金魚と同じく、妻や婚姻といった女性性を持つものとして暴力に曝されている。

昭和十二年（一九三七）『中央公論』に発表された岡本かの子『金魚撩乱』では、主人公の金魚養成師復一の視線から金魚が描かれる。子供の頃から青年期まで金魚屋に育った復一は、「何か実用的な木っ葉か何か」であり「蜚の屑ほどにも思わなかった」金魚を、ある時期から「非現実的でありながら「生命」そのもの」として見るようになり、「現実の真佐子を得られない代償としてほとんど真佐子を髻とさせる美魚を創造したいという意欲⁽²⁵⁾」にかられる。これは幼馴染みの真佐子への恋慕と執着がおこした変化であり、復一は「天女のような」真佐子に似た理想の金魚を作ること没頭し始める⁽²⁶⁾。ここでの金魚は、擬似恋愛の対象として描かれる。また、現実の恋人である秀江を「粗腐病にかかって、身体が錆だらけになり、喘ぐことさえ出来なくなつて水面に臭く浮いている」金魚に例えることや、結婚を促す母に「僕の室内は金魚ですよ」と答えることから、復一が女性を金魚と重ね合わせていることが伺える。一方で、復一は飼育する金魚に餌をやる時、自分の内に「母性」を感じている。復一にとって金魚は自分の「子供」そのものであり、恋愛の対象としての女性であり、母性でもあるといえるだろう。以上の例からも、近代以降の文学作品において、金魚が女性や母性の象徴として描かれた可能性は充分にあるといえる。では、怪異としての金魚はどうだろうか。

ii 怪異としての金魚

大正十三年（一九二四）『講談倶楽部』に発表された岡本綺堂の『冬の金魚』は、痴情の連れから女が入水する「お玉が池事件」に取材した探偵小説である。作品中に登場する、湯の中でも生きる珍種の金魚は、ある男から主人公の画家の手を経て好事家の元へと売り渡されて死ぬ。それと同時に画家と画家の女中とが怪死し、女中が画家の愛人であったこと、画家の弟子に横恋慕した女中が画家を殺害したことが露頭する。この複雑な恋愛関係にもつづいた事件の捜査中に、金魚を斡旋した「ある男」が、女中のかつての密夫であったことも暴かれる。ここでの金魚は「恋愛」と「死」を運ぶものとして、物語に怪奇性を与えている。物語の場面は弘化三年に設定されているが、当時は金魚の品種改良が流行し、奇妙な外見や特色を持つ品種が増加していた⁽²⁸⁾。このことも金魚に怪奇性を持たせる一助となつたのではないだろうか。

昭和三十四年（一九五九）『新潮』に発表された室生犀星『蜜のあはれ』では、金魚自体が怪異として登場する。金魚は若い女性として老作家上山と同居しており、誰もその正体に気づかないが、生きるためにイトミミズや蕨や藻を食す必要がある異形の存在である。金魚の正体を知るのは上山と金魚の実家である金魚屋、「いうれい」と「田村ゆり子」の四人であり、それぞれが金魚を「巧く化けた」と評価している。また、「いうれい」と「田村ゆり子」の二人は既に故人である。二人はこの世とあの世の境界である夕暮れ時に上山の周辺に現れるが、その存在や行動は金魚の口を通して上山に語られ、二人が上山に直接逢うことはない。ここから、金魚が人間の上山よりもあの世に近い存在として設定されていることがわかる。また、物語の後半で金魚は自分の死期が近いことを予期し、上山の周囲の女性への嫉妬を理由に「化けられたら、いつか化けて出てみたい」「化けてでるわよ」と、「ばける」ことを強調して妬婦の怨霊としての性質を暗示する。つまり、『蜜のあはれ』の金魚は女性であり、怪異でもあるのである⁽³⁰⁾。

これまでに挙げた作品の金魚は、いずれも愛嬌のある愛玩物というよりは、どこことなく不気味な存在として描かれている。明治時代、文明開化に伴い、妖怪や怪異は「神経病」として存在を否定された⁽³¹⁾。『梅花氷裂』の金魚が持つ強い怪異性は薄れ、近代文学の金魚は、女性性を持つものとして作品に現れたといえるだろう。しかしその中で怪異性は生きつづけ、『蜜のあはれ』にあるような、女性そのものとして描かれながらも、あの世とこの世を結ぶ存在としての金魚もたしかに存在したのである。

5. おわりに

以上、京伝が、各個の場面において金魚に怪異性や女性性などの意味をもたせ、作品世界を読み解く上で重要なものとして金魚を配置したと考えてきた。

金魚に女性や怪異としての性格を明確に付与し、作品全体に反映させた例は、当時の他の作品には見られない。しかし、『梅花水裂』に描かれた金魚のもつ女性的な性質は、近代以降に発表された『生血』や『金魚撩乱』などにも現れ、「金魚Ⅱ女性」という京伝の捉え方が近代の文学にも生き続けたと言いうことができる。さらに、女性性と怪異性を併せ持つ存在としての金魚も、『蜜のあはれ』や白秋の童謡などに登場し、怪異としての金魚が現代に至るまで描かれてつづけてきたことがわかった。⁽³²⁾

『梅花水裂』の金魚に、典拠にあつた怪異性のみでなく、護り育てるべき子孫や、女性の貞操の表現としての性格が意図的に与えられたとするならば、『梅花水裂』の金魚の利用方法にこそ、京伝の新しさがあると言えるのではないだろうか。

本稿は、「平成十八年度『魅力ある大学院教育』イニシアティブ」〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成の一貫として平成十八年九月十九日に台湾大学で行われた共同ゼミ「文学における日本の表象」に於ける口頭発表「江戸時代における金魚と小説」を元に作成した。

本稿中に使用した『磯馴松金糸腰篋』の読解にあたって、延広真治先生、草双紙研究会の皆様にご教示とご指導を賜りました。また、金魚に関する参考文献を長澤和彦氏にご教示いただきました。記して深謝申し上げます。

註

- (1) 村田祐司「梅の由兵衛もの」の戯作(一)(二)『近世文芸研究と評論』第三十五号・三十六号 一九八八年十一月・一九八九年六月
- (2) 大高洋司氏は『梅花水裂』の意義(『読本研究』第七輯上巻 一九九三年九月)において、「金魚の因果」を『梅花水裂』における「読本の枠組」と指摘した。

- (3) 佐藤深雪「解題」(『山東京伝集』叢書江戸文庫十八 国書刊行会 一九八八年十一月)
- (4) 注三の佐藤深雪氏論文による。
- (5) 大高洋司氏は注二の「梅花水裂」の意義の中で、「京伝が栗野十郎左衛門に負わせているのは、本作における主要登場人物を結び合わせる役割である」と述べた。
- (6) 注三の佐藤深雪氏論文による。
- (7) 善塔正志「京伝の女性像の影―『曙草紙』『忠義伝』『梅花水裂』を通して―」(『人文論究』第四十二巻第三号 一九九二年十二月)、善塔正志「京伝の人物造形の特徴」(『明石工業高等専門学校研究紀要』第三十九号 一九九六年十一月)
- (8) これについて佐藤深雪氏は、注三の論文で、『梅花水裂』は登場人物から意図的に母性をそぎ落とした「母性神話の破産」であるとした。また、「善Ⅱ美Ⅱ母性」、「悪Ⅱ醜Ⅱ魔性」の二項対立を保つために、妊娠で「内なる異形の自然」を露わにした藻の花が、死に際してその醜貌を金魚に移すことで、出産による母性の獲得に失敗したにもかかわらず辛うじて「善」の秩序に残ったとも述べた。また、田川くに子氏は「怪奇と道徳―馬琴と京伝―」(『国文学』十七―十一 一九七二年九月)の中で、京伝の人物形象について、「悪は怪奇と無関係で」あり、「怪奇は道徳をという範囲をのり越えて、生命や本能の歪みそのもの」として描かれたと指摘している。
- (9) 本文の引用は『定本西鶴全集』第八巻(中央公論社 一九五八年)によった。
- (10) 金魚はその後、宝暦頃に流行する。この流行について、日野龍夫氏は「金魚と文人趣味」(『日本古典文学会々報』第三十四号 一九七五年十二月)において、金魚の飼育が文人による反俗高踏の遊びであり、高次の文化的価値を担っていたと指摘した。金魚の飼育は高尚な趣味であり、少なくとも前述の典拠「世間御旗本容気」が著された宝暦年間には金魚が庶民のものではなかったことがわかる。また、大久保金五右衛門の金魚飼育が流行に乗ったものであることも理解できる。
- (11) 本文の引用は『定本西鶴全集』第十四巻(中央公論社 一九五三年)によった。
- (12) 浜田義一郎氏は「江戸川柳辞典」(東京堂 一九九一年)の中でこの句について、「金魚が尾を重たげに動かしながら泳ぐのが、打掛を着た遊女の起居に似ているというのである。中でも尾が特別りっぱな琉金などは、ますますおいらんを思わせる。」と解説したうえで、柳多留「一四編の「おいらんの見えで流金およいでる」の句を紹介している。
- (13) 神田正行「『金魚伝』と『通俗金魁伝』」(『古典資料研究』五二〇〇二年六月)
- (14) この結末は、京伝が『梅花水裂』下巻で予定していた「絶海禅師の教化によりて藻の花の霊成仏得脱の事」という大団円を想起させるが、関連については未考である。
- (15) 磯部祐子「中国才子佳人小説の影響―馬琴の場合―」(『高岡短期大学紀要』十八 二〇〇三年三月)
- (16) 本文の引用は国会図書館所蔵本によった。翻刻にあたっては適宜句読点を付し、表現を漢字に改めた。
- (17) 本文の引用は『山東京伝全集』第十六巻(ベリかん社 一九九七年)によった。

(18) 坪井秀人「かくはしきテキスト」(『文学』五卷五号 二〇〇四年九月)

(19) 鈴木正和「彷徨する(愛)の行方―田村俊子『生血』を読む―」(『近代文学研究』十三 一九九六年二月)

(20) 王紅「田村俊子『生血』論―(少女)から(女)へ―」(『お茶の水女子大学人間文化研究年報』 二二二 一九九九年三月)

(21) 本文の引用は『太宰治全集』第二卷(筑摩書房 一九七一年)によった。

(22) 本文の引用は『復刻版赤い鳥 童話』第四集(ほるぶ出版 一九六九年)によった。

(23) 宮沢健太郎「北原白秋と女性―官能と現実―」(『解釈と鑑賞』六十九―七五 二〇〇四年五月)

(24) 宮本一宏「北原白秋」(一九八六年 桜楓社)

(25) 引用は筑摩日本文学全集二六『岡本かの子』(筑摩書房 一九九二年)による。

(26) 岡村淑美氏はこれについて、復一が至上の金魚作りを目標としたのは、復二の手が届かない(「真佐子」の代替品)とするためであり、そのために「(復二)の理想的な(金魚)は(真佐子)を彷彿させるものでなければならぬ」と述べた。(岡本かの子「金魚撩乱」―自然美と人工美―(『昭和女子大学大学院日本文学紀要』十三 二〇〇二年三月))

(27) 小椋草子氏は、実母のない復一にとって真佐子は女の原型そのものであり、復一が金魚を「生み出す」事によって、「母性やアイデンティティを乗り越えたかった」と論じた。(岡本かの子「金魚撩乱」論(『湘南文学』二〇〇一年三月)) また、高良留美子氏はかの子の作品を比較・分析したうえで、かの子の小説に現れる魚を「女」「妻」、釣師は「家父長」であると指摘した。(『男性性の解体―岡本かの子「金魚撩乱」―(『フェミニズム批評への招待』(学芸書林 一九九五年))

(28) 鈴木克美「金魚と日本人―江戸の金魚ブームを探る―」(二書房 一九九七年)

(29) これについて桐生祐三子氏は「室生犀星『蜜のあはれ』論イメージの源泉―女ひとを探究しつづけた眼」(『福岡大学日本語日本文学』6 一九九六年十一月)において「金魚」は、「若い女」かつ「命」の仮象として利用されていると述べた。また、氏は同論文のなかで中村真一郎が「蜜のあはれ」を「美しい怪談」と分類したことも紹介している。

(30) 宮内淳子氏は「金魚撩乱」論(『淵叢』二 一九九三年七月)の中で、奥野健男氏が「縄文的地母神かの子」(一九七四年)において、「蜜のあはれ」「金魚撩乱」両作品の金魚について「女の本質は金魚だ」と述べられたと紹介されている。奥野氏はまた、『日本近代文学大事典』(講談社 一九七七年)の「室生犀星」項の中で、「蜜のあはれ」の金魚が「生母の姿、娼婦、聖女、義母、妹、妻、娘、恋人など犀星が見つめた女ひとのすべて」をえがいた、と述べている。

(31) 三遊亭円朝「真景累ヶ淵」(『落語怪談咄集』新日本古典文学大系明治編六 岩波書店 二〇〇六年)では、「怪談話」と申すは近來大きに廢りまして、余り寄席で致す者も御坐いません、ト申すものは、幽霊と云ふものは無い、全く神経病だと云ふことに成りましたから、怪談は開化先生がたはお嫌ひ成被事で御座います。」と語られる。また、前出の「冬の金魚」(『半七捕物帳』(三三) 光文社文庫

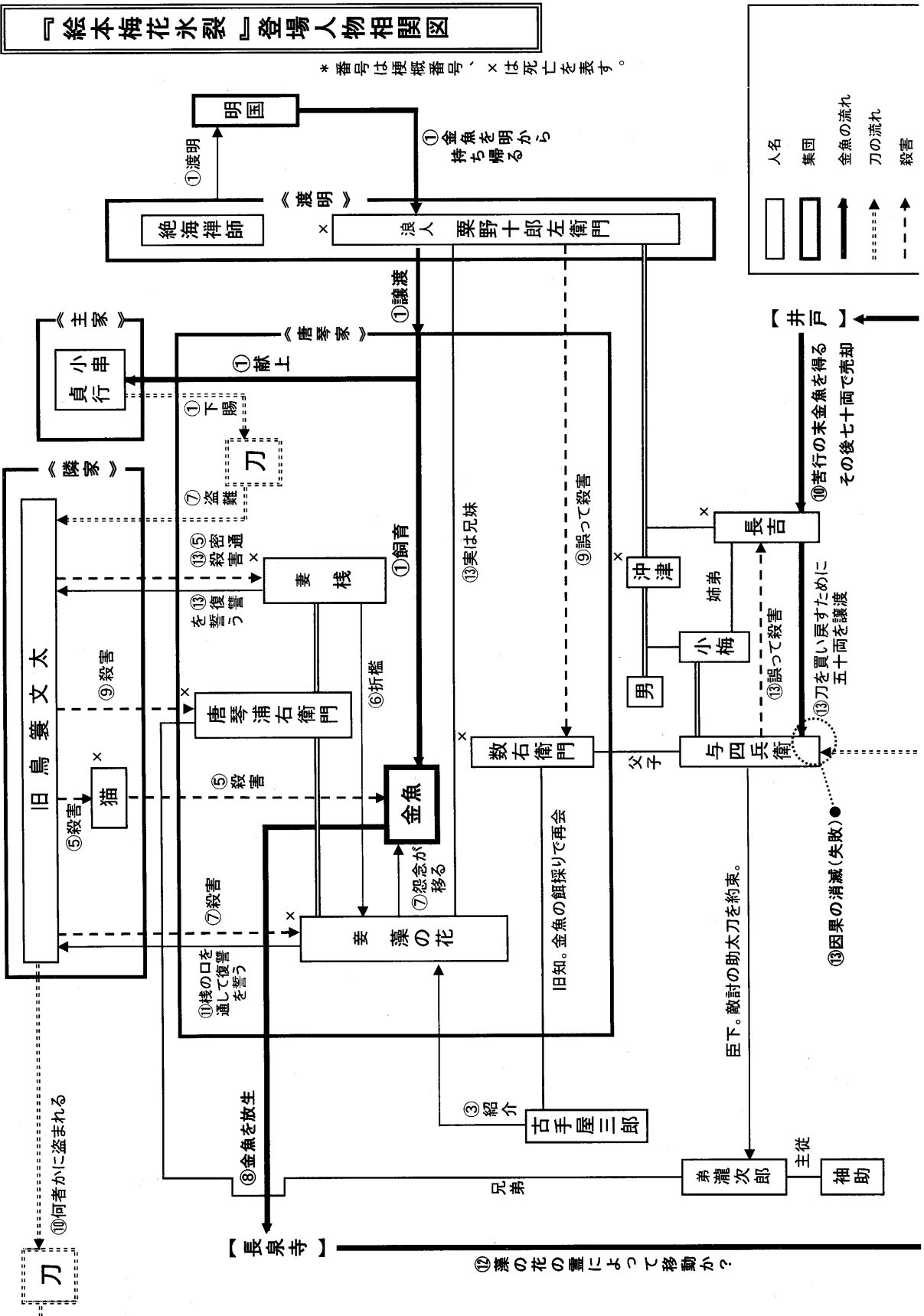
光文社 二〇〇一年)は、「冬の金魚も変りものですが、この宗匠も女中も変りものの方でしょうね。こんにちのお医者にみせたら、みんな何とかいう病名がつくのかもしれませんよ」と締めくくられている。

(32) 最も新しい『梅花氷裂』の利用は、水木しげる氏の『妖怪道五十三次』に見られる。「御油」と題された絵の中に『梅花氷裂』と『磯馴松金糸腰簀』に描かれた三体の金魚の妖怪がデフォルメされて描き込まれている。本作品は二〇〇五年開催の『妖怪道五十三次』展図録(やのまん)に掲載され、その後『妖怪道五十三次』(Y.M.ブックス 二〇〇六年)に再録された。

(二〇〇七年二月一日受理)

『絵本梅花水裂』登場人物相関図

* 番号は梗概番号、×は死亡を表す。



山名 山東京行 『絵本梅花水裂』と金魚

A Symbol of Femininity and Monstrosity :
Goldfish in Santo Kyoden's *Ehon Baika Hyoretsu*

YAMANA Junko

abstract

With goldfish as key images Santo Kyoden combined several sources in *Ehon Baika Hyoretsu*, a yomihon published in 1807. The imagery binds the characters together and serves to sustain the theme of evil spirit or monstrosity throughout the story. Kyoden also added femininity to round out the theme.

This article reveals the novelty and originality of Kyoden's use of goldfish as symbols of femininity and monstrosity, a pioneering practice before several instances from modern Japanese literature.

Keywords : Santo Kyoden, yomihon, *Ehon Baika Hyoretsu*, goldfish, femininity, monstrosity